

路地のような緑とコミュニティの作り方

昨年の2月に大阪府立大学大学院から博士号（農学）を授与されました。論文の内容は、大阪の路地（ろじ／ろうじ）の緑とコミュニティの研究から、震災復興住宅の緑とコミュニティづくりの実践・研究までをまとめたものです。

大阪市の典型的な下町で生まれ育った私は、植木鉢園芸やなぜこんな所に生えているのかわからない樹木などの緑があり、いつも集まってしゃべっている近所のおばちゃんがあり、友達との



大阪の路地の風景、狭い路地ほど樹木や植木鉢が多い。

遊び場でもあった「路地」を原風景として持っています。この雑多だけどあたたかい路地の風景は、高度経済成長の中で広くてきれいな住宅地になっていきましたが、私は「形は変わっても路地の良い所を未来に継承できないか」という想いをずっと持っていました。

では路地の良い所とは何だろう、と研究しました。典型的な大阪の下町というのは、①田んぼのあぜ道がそのまま路地になったタイプ、②耕地整理によってできた大区画の中に少し路地が発達したタイプ、③昭和初期の区画整理によるタイプ、の3種類に分類されます。③や②の様に形が整った下町には同じような緑が多くコミュニティの発達も少ないのですが、複雑な形の下町では、広めの路地では車がなんとか通れるよう家際に植木鉢をよせ、狭い路地ほど植木鉢がはみ出したり大きな木を植えたりと、路地の広さと生活の仕方毎に緑の形態がとても工夫されていました。また、コミュニティの結束も非常に強いため、路地毎の使い方のルールが自然と近所づきあいの中でできていました。

このような路地の緑とコミュニティが、もしかしたら新しいまちの緑やコミュニティづくりにも見られないかと思い、震災復興住宅での緑化活動について同様の調査をしました。特にまちづくりが成功している震災復興住宅では、路地にも無いような独特な緑の形態（団地の真ん中に“だんだん畑”）を工夫し、新しいコミュニティに配慮した緑化活動（全住民に配れる数のサツマイモを栽培）があり、みんなで話し合っただけで決めた“だんだん畑”の使い方に沿って緑化活動を楽しんでおられました。形は違えど、路地と同じように、独特な緑の形態、コミュニティに配慮した緑化活動、使い方のルール（作法）がセットになっている所で、路地のような雑多だけどあたたかい風景ができていたことがわかりました。

このようなセットによってできたコミュニティが表出したような風景を「コミュニティ・ランドスケープ」として提唱し、作りかたの概念を提案しました。これからは住民が主体になって、路地の良さを上手く真似ながら、自らの手でちょっとずつあたたかい風景（ランドスケープ）をつくる時代だと思います。

（自然・環境マネジメント研究部 赤澤宏樹）



震災復興住宅の“だんだん畑”、できたばかりだが活気のある風景ができています。